

## 狂歌歳旦黄表紙五種

浜田義一郎

〔解説〕 天明四年正月、黄表紙の形態をとる異色の歳旦狂歌集が葛屋重三郎を板元として同時に五部出版された。左記がそれである。

前編 大木の生限 三冊（柱題、はへ）

宿屋飯盛序、北尾政美画

後編 太の根 二冊（柱題、はくろ）

歌 磨 画

年始御礼帳 三冊（柱題、御れい）

四方赤良序、歌磨門人千代女画

早来恵方道 三冊（柱題、さこざい）

節黨仲貫序、馬屋既輔跋、北尾政美画

金平子供遊 二冊（柱題、きんひら）

四方赤良序、歌磨門人千代画

急激な狂歌流行の氣運に乗り、しかも、いまや最盛期の黄表紙の形態で、画師に新進氣鋭の政美と歌磨——門人千代女と署名するののも実は歌磨自身であることは『金平子供遊』の項で立証できたと思う——を起用した俊敏な企画はいかにも積極的商法の葛屋にふさわしい。この風変りな集について『早来恵方道』は「ほんにけんだい未聞の草双紙だのふ」と兼題を前代に通わせて洒落ているが、翌五年には極彩色の画像入り『吾妻曲狂歌文庫』を出したのをはじめとして狂歌絵本を続刊し、歌磨の『絵本虫撰』など一連の名品を出版するにいたる出発点となったのである。

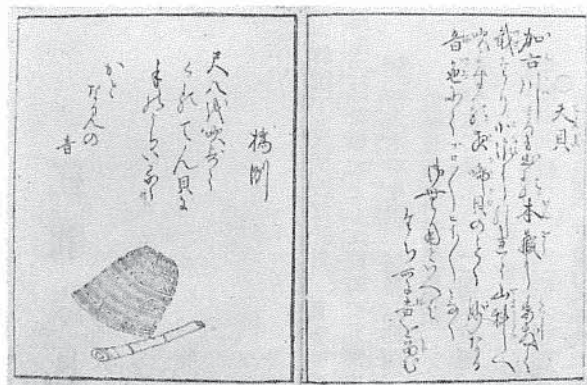
江戸狂歌は安永年間にすでに広範囲の市民の関心を集めていたが、狂歌書の出版には若干の抵抗感があって容易に実現しなかった。この抑制が一般の要望によって解き放たれたのが天明三年正月で、四種の狂歌書がくつわを並べて出版された。撰集としては唐衣橘洲を中心に平秩東作・元の木網・蛙面坊懸水・古瀬勝雄が協力したという『狂歌若葉集』と四方赤良・朱楽菅江共撰の『万載狂歌集』、作法指導書には元の木網著『狂歌浜のきざし』、ほかに木網門下の数寄屋橋連を中心とする『絵本見立仮譬尽』（竹杖為輕編）がある。数寄屋連とは数寄屋河岸付近に住む町人をおもなメンバーとする連中で、この書は鹿津部真顔・算木有政・物事明輔（後に錢屋金埒）・島野畦道・草屋師鯨油杜氏煉方・秦玖呂面らが名をつらねている。狂歌歳旦黄表紙はこの絵本の刺激によると思われるのである。

このような出版状況を見ると、狂歌界は三分野に分れていたと思われる。唐衣橘洲は『狂歌若葉集』の中で、四方赤良が天性の才氣にまかせてよむ奔放な作風を「この比され歌にすさめがち」と批判して伝統的狂歌を守ろうとしているが、元の木網も和学に興味はあっただけに橘洲に近く、赤良はやや異端の顰があるので『見立仮譬尽』にも赤良門下からは一二の例外を除いては、入集していない。

この形勢は赤良の『万載狂歌集』が橘洲の『狂歌若葉集』を圧倒したことによって一変し、赤良は菅江とともに天明狂歌の主流の座を占めることになった。橘洲はそのために一時は狂歌会にも出席しなかつ

たが、木網は直接の対立者でないだけに、芝西久保の隠居所にあって主として町人層の門人を集めて「江戸中半ぶんは西のくぼの門人だよ」(狂歌師細見)といわれるように、赤良の四方側と木網の落栗連が江戸を二分する形になった。

木網門下に町人が多いのに対して、赤良・菅江のいわゆる山手連には概して武士が多いが、赤良だけについていえば、四方側には有力な町人が少くない。その代表的なのが馬喰町の伯楽連と日本橋本町の本町連で、両連は距離も近いのできわめて親密であった。しかも伯楽には宿屋飯盛、本町にはつぶり光が次代を担う俊秀として囑望されたので、四方側でも重きをなしていた。この二人とともに狂歌四天王と言われるのが、数寄屋連の鹿津部真顔と銭屋金埒で、とくに真顔は狂歌の才能においても熱心さの点でも飯盛と拮抗したから、四方側と落栗連を代表する両者の間に競争意識の生じるのは自然の勢いであった。



『絵本見立仮壁尽』(稀書複製)

会本もある)は半紙三冊、夢ち貝、女郎貝など貝のこじつけを主題として、左頁に簡素な絵と狂歌を、右頁に雅文風の解説をのせるもので、形は宝暦初年に出版好評だった『絵本見立百化鳥』に倣っている。上巻の巻頭に元の木網を据え、続いて橘洲、赤良、菅江、ついで鹿津部真顔、巻末は平秩東作という排列である。中、下巻には智恵内子・浜辺黒人・白鯉館卯雲を適当な位置に入れるほかは数寄屋連その他の人々を収めるが、伯楽連と本町連は全く入らず、ことさら

に数寄屋連の感客を誇示したと見られないことはない。そのような経過が刺激となって、おなじく絵入の集を一挙に五部出版することになったのではあるまいか。

宿屋飯盛は前編の『大木の生限』の序文に「柳のみどりの橋本重が請にまかせて」編集を引受けたと書いている。緑橋は通油町と通塩町の間の橋で、そのほとりの通油町の葛屋重三郎に頼まれたというのである。葛屋は吉原大門口に店を構えて吉原細見を出版していたが、安永九年から非公式ながら黄表紙に進出して大いに手腕を発揮し、天明三年秋には出版の中心地日本橋の通油町に本拠を移して、一層の飛躍を期した時期である。おのずから狂歌師葛屋の唐丸も吉原連から伯楽連に移ったわけである。

宿屋飯盛の営む宿屋は小伝馬町三丁目、通油町の隣町であるところから、二人の間に話が起ったのであろうが、由来、歳旦摺物の類は作者が入銀するのが普通だから、希望を募って何冊かに割り振るのは容易なことではない。のみならず作の出来栄にも問題があつて、素人の作を「桜木にものして利徳をせし漆と出んはちと太じるし太いの根」心臓の強すぎる嫌いがあるが承知したとある。前編を『大木の生限』後編を『太の根』と題したのはそういう意味だったのである。

前編は北尾政美の画で、本町連から大屋裏住・問屋酒船・坂月米人など、伯楽から名万寿盛方、大原さこね等が入るが、巻頭が大屋裏住だけに本町連に重点が置かれている。大原言厚記の名で古くから作っていた大先輩に敬意を表したのであろう。そしてこのころ新たに加入したらしい問屋酒船(十二丁の書入に、巴扇やの突出し新造酒船とあるのはその意味だろう)が二か所に出、天地玄黄が三頁を占めるのは苦心の調整策と思われるが、結局三冊十五丁に二十三人を載せている。

これに対して後編は宿屋飯盛が中心で、本町連からは腹唐秋人が入るが伯楽色が濃く、柱題も八はくろVとなっており、また画は葛重と組んでこれから大いに売出そうという歌麿が、門人千代女の名で描い



ている。量は十丁だが二十四人をのせて、一頁に二人おさめることが多いのは本町連との財力の相違のためであろうか。しかし前編八ウに「今夜ハ落栗屋になされまし、毛氈の上に大分あぶれたのがござりやす」とあるのは、木網門下で仮譬尽に入らぬ者の多いのを諷したと見られるから、飯盛は多数に入集の機会を与えたことを誇りとしたに相違ない。

『年始御礼帳』も、その意味で飯盛が幹旋したと思われる。画は歌麿門人千代女で、序は四方赤良である。これは朱楽菅江に宛てた形になつて居り、あとに菅江が「……草双紙あけてめでたき空の青本」と歳旦草双紙を祝福した狂歌をのせ、さらに赤良が「世の中をちとは飾り」という謙遜らしい狂歌をよんでいる。おそらくこの集に四方側を収めて菅江門と共同しなかったことについての会釈であろう。編集は「四方の赤良の膝もと去らず酌取の飯盛」と思われるが、調整に苦しんだと見えて、中巻と下巻の丁付がともに六丁に始まり十丁に終わっている。その事情は知るべくもないが、四方側の直系に板元の葛唐丸も入って四十一人にのぼり、最も人数が多い。

四方側に属するグループが他にいくつかある中で、赤松連を集めたのが政美画の『早来恵方道』である。口上の節蘆仲實、跋の馬屋既輔をはじめとして赤松連は高松藩士を中心とするから、編者もこの二人と想像され、最初に狂詩を出したあたりも武士風の好みであろう。収めるところは二十人である。

最後に紹介するのは牛天神下に住む幕臣山口彦十郎狂名山道高彦の小石川連を中心とする集『金平子供遊』である。高彦の妻も吉野葛子の名で狂歌をよく関係で、この狂名の命名者の知恵内志（普通は内子と書く。落栗連から例外的に入るのかわざと字を変えたのであろう）、吉原大文字屋の加保茶元成の妻秋風女房などの女流の入るのが異色で、子供の遊びを主題としたのも、それにふさわしい。

この集の画も歌麿門人千代女である。浮世絵研究家はこれを歌麿自身であろうと推測しながらも、女の髪の生際などに多少の不安があっ

て断定しかねるそうである。歌麿については『年始御礼帳』六ウの書入れに「都ぞ春の錦絵なりけりとは長いうた丸だ」とあったが、本書では八ウの少女に「錦絵をお見せ歌麿が絵だね」と言わせるほかに、四ウ五オの部分に注目すべき詞と狂歌がある。すなわち

狂歌は、

かんの好ひ声をはる駒引出して揃ふばちびんほめるうた様

詞は、

三筋のいと音じめどうもいへぬと、門之助のかけ合ひきついてもだ。山の手のはまむらや大明神様、だれがほめるのか声ばかりた。

(七一頁参照)

すなわち「ほめるうた様」と「誰がほめるのか声ばかり」を意識的に照応させていると見るほかない。市川門之介や山の手のはまむら屋（瀬川路考）がどのような楽屋落ちを含むかは知るべくもないが、歌麿が姿を現わさないで声ばかりというのは、匿名を暗示していると思われることが出来そうである。のみならず国会図書館の鈴木重三氏の教示によって『歌麿全集』（吉田映二著、昭一六）を検すると、その第二九四七福神乗合船（間錦三枚続）の宝船の竜頭の舳先と帆の縁につけた飾りの布片の様子は、一ウ山道高彦の宝舟（七一頁参照）とよく似ているし、また第一二八四年中行事正月（中判）の万歳の大夫と才蔵は『年始御礼帳』下六オの万歳（六六頁）とほとんど完全に一致して、無敷包の置き所まで同じである。これは寛政年中のものというから、無名の女性門人の図柄を円熟期の巨匠歌麿が模倣したことになって、不合理というほかない。かくして千代女はすなわち歌麿自身と断定してほぼ差支ないのである。

ただし、三冊のうち一冊だけに本来の名を署し、二冊を門人の名とした理由は不明で、あるいは『金平子供遊』に女流が多いので画師も女の名とし、『年始御礼帳』も右へ習えしたというような事情かもしれない。とすると両方の編集に当った宿屋飯盛のさかしからでもあろうか。

以上の五部はいずれも扇巴の図案の題簽を付して、おそらくは四方側の盛大を誇示したのであろうが、出版部数は本の性質上ごく少なかったと見えて、後に版木の字を削って咄本『樽酒利上手』その他に利用した画面は、描線がまだきわめて鮮明である。したがって原本の伝存は極度に少く、国書総目録によれば左のごとくである。

大木の生限 大東急

太の根 大東急・東大

年始御礼帳 国会、東大霞亭、日比谷

早来恵方道 東博、日比谷、大東急

金平子供遊 国会、日比谷

ほかに平戸の松浦家旧蔵と日比谷図書館蔵の端本を参看したが、破れや手摺れのために読めない箇所があり、また金平子供遊は一丁分をついに見ることができなかった。

終りに写真撮影を許された各図書館、文庫に謝意を表したい。

栗の本編 大木の生限 三冊 葛屋板

柱題 狂歌 中 はへ

宿屋飯盛序

北尾杉泉政美画

一オ 序

年のあしたの諸君の  
され歌姿のうつくしさ  
ハ浜村やか舞台顔に似  
たり。読んで味ふれば  
とらやきさつま芋に比  
すへからず。是を桜木  
にもして利徳をせし  
めうるしと出んとハちとふとしるしふといの根なれと、さら  
りと柳のみとり橋本重か請にまかせ、おつと放下師の小刀の  
み込山の寒鴉と、すぎかへしのすきまなく草雙紙にかいつけ  
やりぬ。時は陸月のめてたひ日、鯛のみそすてひつかける四  
方の赤良かひさもとさらす酌取の宿屋飯盛まつかな恥をつん  
出て序す。



一ウ 上

又年を鳥居の数もふる狐尾をみせすして春へ越にき

大屋裏住

〔絵〕 頭巾をかずき杖をつく老人、鳥居の前の石橋を渡る。

二オ 梅咲と人もとゝめて通さぬかまた声もせず鶯の関

膳前檐尚義

・これから権三が所でのみかけ山師と出よふ東作子どふた〜。

〔絵〕 梅下をあるく男二人、一人は道服を着た坊主頭の老人

(平秩東作の似顔か)。

二ウ

加保茶元成

我門も松竹の世の人なみにやふれ上下ひつはるハ松



三才

歳暮

くるゝ日はけふて三百六十の六さかけのはらひをもせず

〔絵〕 吉原の見世格子の前をゆく礼者。

恵方よりけふ初買もよし原にまた吉例の居つゝけやせん

三才

名万寿盛方

四才

・夕アゆうあの客ハ光るといふ大じんてかみを大ぜいつれてきんしたよ。

・おふぢさん又ふくしまやがしほやをいひすかな。

・狂哥師きやうかのさいけんのさくしやじやアあんめいしいつそうぬほれだよ。

〔絵〕 遊女の座敷で女たちを相手にのむ客。禿二人、若い者らしい男もいる。

四才

勘定外成

谷の戸をにちりあかりの鶯はこいちやのいろや音をたつる釜

五才

大原さこね

釜かけて風雅の友をまつのうち煙りふく茶のかほりたつ春

〔絵〕 茶室の中の男たち。

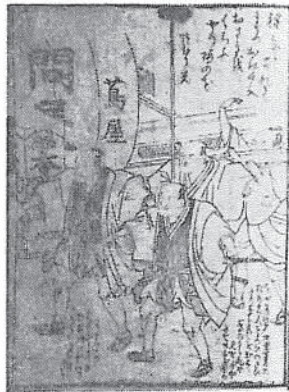
五才

やはり棟梁

年月をかさね筆筒のひきたしも明て嬉しき節小袖かな

・けふぬめしもりが所に詩会がある、あすはさかふねがまんようの会どくさてわかんの才子もいそがしい。

〔絵〕 外出の支度をする男、手伝う妻。



六才

中 標葉めづりに召れて春のお江戸入おさきをはらふや

り梅の花

つむり光

・こゝがかの江戸四里四方の狂哥名人そろひの歳旦草ぞうしを出す篇のから丸が見せじや、

さてもにぎやか。

・つりまはしの元手なし下手狂哥師のおこつりめらなかつたつけ

〔絵〕 葛屋ののれんの前をゆく大名通行の先供。

六才

天地玄黄

・これにきこうさんおはやうござります。

・墨河すみがわさんぎんそうさんへもよろしく。

〔絵〕 礼者に応対する人妻、横に童女が羽子板をもつ。

七才

天地玄黄

柳折る餅つきの雪の花にめて出口まかせの狂歌しま原

〔絵〕 男にかつがれて枝を折る少女、それをながめる遊女。

七才

奈良花丸

・とくわかに御万歳集才藏集ハ赤良の撰にたまします。

〔絵〕 万歳しきりに舞うを子供らが見る。

八才

於曾礼良

追羽子もはづんておちやめのとまでひいふうみつの始にそつ

・はご板で人のあごをうちなさんな、ヲヤむかふからまゝなりさんがくる。

〔絵〕 路上で羽子つく女と乳母。

八才

問屋酒船

惣花を打手の槌にあらかねの蔓につるさく花の初買

・巴扇くわんやハ惣しまいでござりやす。こんやハ落栗らくりやになされまし毛

せんのうへにでへぶあふれたのがござります。

九才

一富士二鷹

呼たてゝうたゝねの日の禿子の小松が手をもひけやひけ四ツ  
・五でうときとうをよびにやらつせ。ホンニこのたいこといへハ寛保かんぽじぶんの左右さうが田舎いんか急いそぼしといふ狂歌集に、おのがどんからといふだいのこの歌ハよくよみやした。此頃もおつかぶせのた

いこが見へるがこいらつらの皮の千枚ばりではつたのたげな。  
〔絵〕 巴扇屋見世先、客三人と女将。

九ウ

海老船守

古としに霞のかんな引かけて一夜けつれは新しの春

十ネ

将中尉泡盛

二子山とちらも対の裾もよふかすみそめてそ春ハきにけり

・けふ日本橋から品川迄礼にゆかねばならぬなんりほどの道であ  
ろう。なむさん<sup>(七)</sup>はまのきさこをわすれてきた。

〔絵〕 梅さく野を行く礼者、遠くに山々。

十ウ

この友はかはらぬ春とあきの方かちろの音もたから舟哉

坂月米人

下

十一オ

〔絵〕 酒樽や菓子箱を積み、花模様の小袖を台にのせ、紙に

「進上 四方連中 巴扇屋内ふねと」とあり、梅の枝の短

冊に田夫林人、那万須盛方、つむり光、宿屋飯盛、法帖

石摺、土師孫安、片袖足成の名をしるす。

十一ウ

大門の扉もあけてよい歳と申しんしやんの御けいせい哉

問屋酒船

十二オ

新造も禿もはれを正月着おいらんの気ははるの花やか

土師孫安

・あれが巴扇やのつき出し新ぞう酒ふねとやらかの

〔絵〕 遊女の道中姿。

十二ウ

大門を明のはるかに見渡せは客まつ竹の仲の町哉 片袖足成

・おいらん夕アの客衆はくらくらいたりほへたりして、いつそ狼の  
よふでありした。

・そんな事をいつて狂哥師にわらなれやんな。くらいつくほへると

ハ犬にかぎる事だと、はまのきさこにもおしへてある。

十三オ

巾着の口をも明の雲はらひ貫し花の春ふくろ哉 法帖石摺

・めづらしく玄黄<sup>(二〇)</sup>さんがみへやす。おゝかたむかふじまの鯉と出か  
けなんしたらふ。

十三ウ

〔絵〕 中の町の茶屋に腰かける遊女と、禿、女将。

天地玄黄

池水を鏡に梅かかほ見れハ女に庭のもゝのはな筋

・おかつさんさくらのじぶんにおむめさんやおなみさんといつしよ  
に又きやせう。

・かうらいやがはま丁のべつそうでなめしでんがくよくくわへのし  
やれハ有がたかつた。

〔絵〕 梅さく野辺に女二人と男そぞろ歩き。

十四オ

沢辺あや子

元日に春狂言を書初ハ哥舞きに花のさくしやなりけり

・かんがさんおめへをしゆくしてよみやした。

〔絵〕 室内に女形と坊主頭の老人、若い女の三人坐す。

積こんで我かちに水揚屋町初惣花のけいきよし原

十四ウ

田夫野人

・狂哥ぎりのはらがすぎやがしとなつてきた、ちやつけと出よう。

・わつちも千里の馬をしる伯楽<sup>(二一)</sup>連でおざんす、大象をあてにまちが  
いだらけの譬説とハちがいんすよ。

〔絵〕 遊女と客。若い者が台の物を据える。

十五オ

あらかねの土人形やひさかたの飴宝引も門にたつ春

人真似小まね

・みんなかこゝへ木戸やがやあもくいゝ子だぞ。

〔絵〕 木戸ぎわに荷をおろし、子供らに宝引を引かせる頬か  
ぶりの飴屋。

十五ウ

湯車いかほ

月花も身請の数やよし吉に気もはるの夜の価千金<sup>(二二)</sup>

・千両の金をつむといへども一人の女郎にしかず。さか舟<sup>(二三)</sup>さんのお  
みうけ金うけとりました。

・千両とハちと気もはるな山へ手のとゞく所だ。湯治にきたらより  
なヨ。

〔絵〕 千両箱を前に客と亭主。



北尾杉泉政美画

注

- (一) 平秩東作、山師と評された。(二) つむり光。(三) 狂歌師細見、天明三年刊。(四) 吉原江戸町扇屋宇右衛門。(五) 後万載集は天明五年、才藏集は同七年に刊。(六) 紀儘成。(七) 五丁、其東。ともに吉原の男芸者。(八) 寛保元年刊、雪中吏登撰『狂歌田舎烏帽子。』(九) 元の木綱の著。(一〇) 天地玄黄。(一一) 松本幸四郎、狂名高麗酒連人。(一二) 芳沢あやめ。但し赤良の与えた狂名は、あやめの真久良。(一三) 問屋酒船。

後編 栗の本  
太の根 二冊 葛屋板

柱題 はくろ上 はくろ

哥麿画

上

一オ

兄妹おとく／＼とくむ  
屠蘇の能ひ子たからや  
むつまじの月

紀たらんど

〔絵〕 つるした判取帳に奥田平兵衛とある。妻、娘、息子と屠蘇を祝う。

一ウ

松たてるもんはちとせ  
のつるの丸素袍を羽根  
にみつの朝夷奈  
梅やなきこれや造化の  
道具だてかすみの幕も  
ひき明の春

宿屋飯盛

二オ

・四方がすねつかぢりの  
こちつけのあさいな  
だ。狂哥をよんでくん  
なざるならかたじけ仲  
伊のむすこかぶだモ  
サ。

・イヨさだ九郎さんいゝ  
と申ヤス。

〔絵〕 朝比奈の芝居と

見物人。

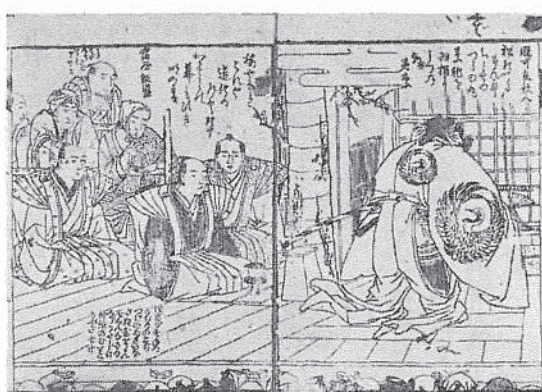
二ウ

ふんとしもとけてや出し玉の春たからもふけてにきる瑞相

中仙道問屋馬人



腹可良秋人



三才 〔絵〕 路上の万歳、才蔵のふんどしがとけ引ずっている。  
宝びきの家に子供のなかりせは春のあそひになにをひかまし

三才 〔絵〕 辻宝引と子供たち。  
音小弁垂高

初鵝にうまれたまこの君か代へ庇かるへきためし聘見ん  
ぬら蔵人  
〔絵〕 つき米やの新年。  
土師攝安

四才 行丈も揃ふ小袖のきそはじめ恵方参りにだてを正月  
七 常持  
狂歌にもめてたき趣向正月の千代の御慶を申います  
〔絵〕 道をゆく御殿女中たち。  
根穀辛輔

四才 鞠もつきはねもつくだの町ふうにわらやの子迄尻をふり袖  
草刈 童  
おさかなにお手がよこれや正月の大盃を見事ほしか場  
・おさかづきをくつとほしのかきやすさ、つねもち様めでたい

五才 〔絵〕 坊主頭と対座する礼者盃を乾す。外で鞠つく娘たち。  
勘定疎人  
去年よりの垢をおとしてはるの日にせんたくしまの小袖きよ  
けれ

年玉も時にあふきの箱の紐まつとく若に御万歳らく  
四辻占綿  
・きのふの礼ののこりをうめもとと出すなるまい、さりとねきが  
仲丁たス。

〔絵〕 男着かえ、女房袖だたみにする。

五才 玉手箱あけて浦島太郎月千代万代祝ひつる亀  
膝元佐具留

三味線のいとなかゝれと子日より小松町にハ千代をひきそめ  
・土はしのまゝ成さんがモウはりにくるじぶんだが。  
〔絵〕 浦島をかけた屏風のかげに芸者三人。  
袋 筒長

下

六才 若やきて向ふ初日も赤本のもゝ太郎月宝をや得ん  
於保久旅人  
・おわか衆のはかまごしをあてるなちと気のわるくなるせんきた。  
・小づちやかくれみのも大じの物だが、三百はりこんで柳ぼしのた  
から合に出そふス。  
・犬ハ二もんじやへおつかいに参りやした。

六才 猪牙に寝てゆく初買のはつ夢や波のり船の音も吉原  
小袖行丈  
きそはしめ猪牙と簪の乗初もどらけの間万よし原  
門限面倒

七才 ・さぬ／＼／＼これハ水のおとゝきこゑよふか。  
・ぬしが吉原をはじめたら大のやでさそやかましからふの。  
・かへりにはしバのわたるか所へよりやせう、去年のなめしのはら  
いときあつたまゝだ。

七才 〔絵〕 隅田川の棧橋に猪牙を着けようとする船頭。舟に向つ  
て来る船宿のおかみ、客の一人は目ばかり頭巾。  
春たては山も霞をきそはしめきのふにかへてけふはみよし野  
宝引を小松とおほしひき給へ蚊に喰れさる千代のためしに

八才 ・御しんぞう様ほう引ハおよしあそばして手みじかにめくりにても  
梁 仲墨



なされまし。

・女がそのやうな事をしるものか、せめててうはんかちよぼいちらわしもきがあるけれど。

・モウこつちへとつておきやした。

〔絵〕 二階の間で女子供の宝引。

八ウ

襖 明立

懸帳へしめかさりして掛取もけさハ雑煮にはらハはるなり

・狂哥一首よむうち餅を三十一切くつた、なんの造作もない事だ。

・旦那の地にてハあきれがお礼にくるであらう。

〔絵〕 雑煮食う男、帳面に万屋万兵衛とある。

九オ

車井の音もよし野の花の春とくく起て汲や若水

雀 酒盛

・若水くんでかみゆふてとハ、なんとくるま井戸のよくまねる口であらふ。

〔絵〕 井戸で若水をくむ女。

九ウ

船かさりうらしろくく明わたるまつのすきまにほたわらの影

紀 安丸

丹頂の齡は千代の年神の棚を恵方に鶴の声かな 吹殻咽人

十オ

〔絵〕 海上をとぶ鶴三羽。

十ウ

鶏とくもにけふから口ひらきめてたい事をゆふつけの鳥

丹 青 斎

・足の三本あるやつをみた事ハないが、なぜにハとりに五とくがあるやら。

〔絵〕 机に向つて筆をとる男、窓の前に鶏がいる。 うた麻呂画

注

(一) 吉原五十間道角の酒店。息子の大門喜和成は四年四月に没して追悼の『いたみ諸白』が出版され、紀たらんなどは狂歌四首を寄せた。(二) 土師攝安。(三) 七常持。(四) 紀ままた成。(五) 柳橋の河内屋で天明三年四月、竹杖為輕が主催した。

年始御礼帳 三冊 葛屋板

柱題 上御れい 御れい中 御れい下

歌麿門人千代女画

(二オ)

序

春の始の御悦恵方に向ひしやんく祝ふて三度うち納申候

畢 抑年の初の歳旦ハ詩歌連誹の道を以て可申之処人々狂歌の会に駆催さるゝの間猶も杓子も連木となる谷の鶯せつ

かひの名を忘れて蛙の面に水を

かくるに似たり 頗本屋に与へ

候 訖将又年々歳旦之趣向事旧

候 問艸草子摺物の遊三冊二冊の

年玉物四方の人々これを狂詠す

追々御覧あらハ尤本望なり心事

多しといへども大会の次を期す

るが為に委ハ腐毫にあたハず 狂々謹言

正月元日

四方赤良(扇巴印)

謹上朱楽かん江殿

へたてつる年一枚絵草双紙あけてめでたき空の青本

朱楽漢江

世中をちとハかざりの海老のひげくひそらしても春やむ

かへん

上

屠 蘇

峯 松風

千とせまでかはらぬ門のとそ酒に袋の色もあけそめし春

教の子 子子孫彦

あら玉のやうなるなりの福包うちにこふたる教の子だから

・けふは本町伯楽も見へるはずだ。







(六オ)

長髪斗

地口有武

目出たさハ数のたからの蔵ひらきよむともつきぬ春の長のし  
・ことしハわけて新宅でめでたい春をむかふる事だ。二日がすきき  
三日がよし原四日がむかふじま五日がしばゐ、めでたいく。  
〔絵〕 内蔵の前にすわる上下姿の男。

(六ウ)

すき油

阿那可師古

けさハはや柳の髪をすきあふらきも春風にみどりそふらん  
五色糸

紀 定丸

空色ものときき春のいとゆふもとし玉物によりてくるなり  
・見たせバ柳さくら草をこきまぜてみやこぞはるのにしき多なり  
けりとハ、長い<sup>(モ)</sup>うた丸だ。  
・有<sup>(モ)</sup>たけさんのうたのつぎにぬさしづめ<sup>(モ)</sup>ゑんしうやに大さかやとい  
ふまくだ。

(七オ)

桜 飴

紀 躬鹿

小ふくろにのしをもはるのしるしばかりおめにかけたる本さ  
くらあめ  
・本丁二丁めのいとやとみて、よいはらからのむすめがとふる、  
モシく<sup>(モ)</sup>けいぎさんく。  
・かへりに重<sup>(モ)</sup>さんのみせへよつて新上りをかつていかう。  
・おうちへさんのにしき多が又出たにとんだいゝねへ。  
〔絵〕 飴売と糸売、中央に桜草の紋付を着た男と、二人づれ  
の娘が歩いて行く。

(七ウ)

香 煎

梅下武士

池のはたとやかうせんと蔵旦の春のしゆこうをふり出し筒  
蔵 旦

棹 幕

(八オ)

破魔弓

天保川成

とてもうそ年のはらひのさつくとやりくれ竹に春をまつ風  
初日影さすがに武士のおさな子ハけふはま弓をはる霞哉

蔵 幕

行年の尾上の松魚塩ふりて直も高砂と人ハいふなり

・ゆかたからの思ひ付か。

〔絵〕 香煎売の家の前を、破魔弓をかついだ供をつれて通る  
武士、門松の横を通る魚売と箒をかついだ老女。

(八ウ)

寒露梅

大飯食人

けふひらく年たまものゝかんろ梅すいなる客の花とこそみれ  
・モシへくらんどさん、おまんまをおあんなんせんか、コレくむ  
めのかや、かんろばいをもつてきや。

(九オ)

みづから

隅田中波

みづからもよろこんぶとハ姫はじめゑんをむすぶの事でござ  
んしよ

手まり

河岸高積

ひいふうとみよハゆたかに数まりをつけどもつきぬなかき春  
の日

・けふハひがよい左りへござれとハ、たから合の席のもんく。

〔絵〕 居続け客が女郎とならんで、廊下で禿たちが鞠をつく  
のを見ている。

(九ウ)

ごまめ

富家来富有

海老ちいもごまめでこしをのし包我にあやかれ老をゆづりは  
・けふハ小川町からするがだい、たらくおりにおちやの水の方を  
つとめませう。

いかのぼり

つハものゝ交

(十オ)

福寿草

紀津丸改鶴 羽重

去年よりも花の春まつかさりわらわらふ門にハ来る福寿草  
・おらあなんでもきのつまる事ハきらいだよ、これからつるの丸の  
たこでもあげよふ。

〔絵〕 なまこ堀の前を通る年礼の武士。福寿草売の荷あり。

(十ウ)

鼠半切

書出田丸

かき出しによこせし紙も春くればうれしくくる鼠半切  
枝柿 小造千里

年玉のはる／＼きぬる進物をまづあけてみてみの、枝柿  
・あはん切より中／＼ふうがでのおもくりい。  
・多だがきのはこの上にねづみが出て、はん切のかみにつき合ふや  
つさ。

〔絵〕 坐つて鼠半切を巻く男、横に枝柿の箱がある。

(十一オ)

長水引

阿久垂粕

申いますとあないを  
こうはくの長水引のと  
し玉の春

・はるの哥とて 万ざい  
にとくわかちをまい  
らせん、かれいの通り  
オぞうにて。

・かやう申才藏集なんど、万ざい集のちよびとらいれき。

〔絵〕 座敷の中で演じる万蔵の太夫と才藏。

(十一ウ)

丸 盆

加倍仲塗

年玉といふしにやみよしの、山引の盆のいとめでたけれ  
いかのぼりの風ふけ 行かふ礼者の先がけしたる梅花  
春くれハ門に先さすみれハはやいやかさねへき人の名なれや  
・うつばりの中すみさんがきそうなものだ。たしかばくれんの中に  
あるとさ。(二二)

(十二オ)

礼 札

みどりの葉十

上下もけふあら玉のきそはしめとなたさまへも御礼札かな

簪 箱

藤 まん丸

春霞辰のとし玉いく千代もほそ長く見ん鶴のはし箱

・まいどおせな事。

・よいおあんばい。

・来年ハまごひこりうになされ、かへりの三丁めだにで大きあひ  
だ。

〔絵〕 加倍仲塗の兼題を書いた衝立の前に給仕女が盆をもつ  
て立ち、座敷では客二人膳に向う。

(十二ウ)

袖 べし

柿 下手丸

いくとせもさかゆべしとてかわらぬハ千代万やか春のたま物  
・仲ぬり会のけんたいハまだよまぬが。

くもりなき初日にあハせかゝみもちとぎすましつゝ祝ふはが  
ため

(十三オ)

玉 煙草

栗 成笑

年々にあら玉たばこきさみたるその国とはかりしれらず

・くりのもとハ狂歌の家からおちぐりとふぐりとをあらせてみつぐ  
り

もち口のさしもかたきをくひとめしぐそくのそなえいはふめ  
でたさ

・父うち栗たんばのいけどり、ちやうすハごいされ。

〔絵〕 鏡開きで具足を飾った部屋に礼装の男と女、ゆべしの  
髪を台にのせた男児。

(十三ウ)

五 倍子

薦 唐丸

何事もめでたきふしの年玉にかねをつけたる千金の春

錦 画

雲 楽 斎

あら玉のとしの初の一まい絵二枚屏風にはるのい多つと

(十四オ)

色 元 結

余 茶 福 有

もらふよりまづふうじ目をあけほのハいろもとゆひのとし玉  
の春

・掃橋さんと雲楽さんハいつでも女の中のまめいりさ。

・女の目ハすどをはれといふが男の目も丸いがいよ。

〔絵〕 鉄漿をつけようとする女と、朋輩同士髪を結う女。

(十四ウ)

三 味 線 の こ ま

布 留 糸 道



一年に一度給へるたまものはこまかに心つきしとし玉

・おれが三みせんもきやう歌のかしらによんどころなくたのまれ  
た。

御室焼茶碗

くれ竹よほけ

箱入の茶わんもとしの玉手箱あくればしわきおむろ焼なり

・アイ宇兵へがおむろやきのちやわんをあげます。

道中双六

雲のした人

くたひれもせず道中双六のさいの目にたつ今朝のあけぼの

・おかついもう上りだよ。

鏡餅

てる／＼法師

岩戸をも明れはやたの鏡もちはるにうつれる月と日のかけ

・へん／＼／＼あんまりちやな書いれだが月迫したからこめん  
／＼。

〔絵〕 炬燵で唄本を見る男、寝ころんで女兒と双六する男、

廊下に細君。

(十五ウ)

銅杓子

播磨鍋島

初春の用にもたつとし玉と御慶をかねのしやくし一本

・ふぐとの汁のあつものハモウにへつるか。

・つくままつりのなべならでわしやはつかしいとなまめり。

貝杓子

多田人成

きのふまでふう／＼貝のかけとりもしやくしのゑかほつくる  
とし玉

・林間にさけをあたゝめてもみちをたき木といでその時のほちの  
木かなんだかきかしれぬ。

歌麿門人

千代女画

注 (下巻の丁付も六から十だが便宜上十一から十五とした。)

(一) 子孫彦の会は毎月二・十二・廿二日〔狂歌師細見〕。(二) 垢染衛門。

(三) 只の人成。(四) 歌麿。(五) 地口有武。(六) 鼻毛長人か。(七)

吉原の男芸者五丁の屋号。(八) 中井敬義号董堂。腹可良秋人。(九) 葛屋。

(一〇) 万載集著微来歴。窓川春町作。(一一) 浜辺黒人。(一二) 蓬萊山

人。(一三) 観流斎原富は近代三絃に名たゝる人なり、其子夏若子、たは

れ歌の名をこひ侍りければ布留絲道と名つけ侍る〔巴人集〕

— 120 —



・あぶぎにおせわだ。

〔絵〕 なまこ塀の前ゆく礼者、扇売に声をかける男。

四ウ

小川町住

東風吹ハ誰袖の香としら梅の花みもすいな真中の町

・おあいさんおめでたうおさんす、おいらんおはやうごしたくがお  
できなされました。春そう／＼おあいとありかたい、ねほけさ  
んかんこうさんはつむだかへ シラアン。

・とめはのまつゝきついものでおさんす。硯箱をやくそくしたが今  
にもつてこねへよ。

・とめきよしやよ。

五オ

大黒のすねにみそ日の御仕舞も能ひとや申声をはる風

・裏住様よし高砂のうらすみのへのきしとおいわめ申ませう。

・おや／＼あの人ゝよくうら住さんにたよ。

〔絵〕 中の町、大黒舞や身ぶりが通るのを遊女がすだれ越し  
に見る。

五ウ

万歳ハ三十一文字のはしら立誰か袖むすひとく和歌の道

ふしわらの仲實

・跡から才藏集もそめて  
もらひたい。

・主たちゝさつはりぜう  
なしでありんす。

・それだからきがいたま  
んでよし。

〔絵〕 筆をとる遊女、

短冊を見る客、うし

ろにかけてある小袖は烏帽子、鼓、扇、松葉の模様。

下



菅垣仲住

六オ

気はれては風新柳の髪結のとしこしかけてくしけつりかけ

・こゝも出口のやなぎばしと乗りそめゝきはれる様ニ、しんりう

をやなぎニしてしんぞうかいゝどふだ。

・やなぎゝはるをちやニしたやうで、そしてあを／＼とまこと大通  
にどりだ。

星屋光次

穂俵のおとろのかみもくしいれて青柳めくや雨のぎんだし

〔絵〕 橋のたもとの家の削りかけの下っている家に這入る着  
流しの武士。

六ウ

岡部唐安

ことぶきのながきためしをしめ鑄御宝からとひらくいながら

沢辺帆足

きみゆへにいゝはやさるゝうきなをばつみて人目をそでにつ

ゝまん

七オ

・お江戸ハ狂歌がはやるとのこんだが、あすかやまの日くらしの近  
所だんべい。

・かきそめハ氏神さん、これでとりぬだ。

・わがこゝろさそいたつなり初霞まだ見ぬかたの春に遊べと。

〔絵〕 稲倉の前で若菜をつむ百姓女、鳥居に「わがこゝろ」

の歌を書きつける男。

七ウ

矢立綿純

うつことをすとゝんとんとねわすれてあけ七種にはやすまな  
いた

・なゝくさだからそれではたくさひどく、どふもいへぬ。

磯辺賤男

八オ

ふるとしの皺をのしめにはな色のあさ上下のこゝろ若松

〔絵〕 家の中で七草うつ男、軒下で帳面を見ながら年礼の品  
を挾箱に入れさせる男。

独寝 欠

八ウ

もとゆひの弦で治る御代なれば破魔弓とりのひまぞめでたき

宮地かけ富

たちまち辰の春なる節分の豆でとしをぞとりますのうち

・ねつからうねへ。

・にしのかほからもらうた、ゆみやほまのきさこだ。

九才

七転八起

さる舞ししほから声を春なれや日もきも永くおまつてく

・おいらがみは英がうるさくかいておいたよ

〔絵〕 節分の豆売、破魔弓もつ子、鯛の頭を軒にさす男、猿

まわし

九ウ

宇和空成

みのかさのかくるゝ名こそかくれなき宝のかずもも太郎月

飛車先の角道

十才

よし原の春を向ふの一とすじにくめとも尽ぬいつみやの酒

北尾三三政美画

十ウ

〔絵〕 和泉屋の座敷、英一蝶の衝立あり、隠れみの持つ娘。往昔桃太郎あり夫に啜のかわ太郎。今又おなじ四方太郎に。猿とは尻の赤松連。春興へ思ひの得手勝手、兜の緒をしめ縄宝引縄の引をめぐり菱笠の三宝迄よむともつきぬむた形の数は。日本一の黍団子に真猿目出たき宝より赤良盛て読ときは盛て出る狂歌人。なを春深くことばの花の、赤ひを松が枝エじやアねエじやアねへ歟

赤松連定会毎月二日間初筵

注

(一) 朱楽菅江独特の筆くせ。(二) 四方側『狂歌知足振』。(三) 吉原連の多い夫人だらう。(四) 四方赤良の狂詩の名。(五) 大屋裏住。(六) この衣裳について『巴人集』に「文字様のうかれめたが袖、むつきのきぬの模様何よけんといひければ、万歳のあぼしつとみあぶぎに松葉ちらしたるかたよからんといひしに、はたしてその色目にさだめ侍りし」とある。万載狂歌集にちなむ模様で、評判になつたのを、画中にそれとなく穿つたのである。誰袖は狂歌女郎として知られた。(七) 元の木網の住所。

金平子供遊 二冊 第二丁ウ三丁オ欠

柱題 きん平 上 きんひら 下

序 四方赤良

画 歌麿門人 千代女

一才

上

序

比へ一条のあんの御宇でもなく大江山みち高彦の御奥のあんの坐敷にてけふなん狂歌の会ありとて、うち栗のもとよりつけこされしを、おつと心得丹波のいけとり綱と綱との字の間違て羅生門かと思ひの外、行ちかひたる坂田金平よものあからの酔心地におしてくるまの牛天神下、よりあふ例のひとねいりに言葉の花の江戸川より波のり舟をこぎ出してむかふ島と心さし、頼光の四天王と和歌三神をないませのつな手にかけれし七福神、十のねふりの目ざましき子ども遊びのがき大将とハなりぬ。

まさに見し一富士二鷹三茄子ゆめちがへしてばくにくハすなまきに 不工面待 四方赤良

一ウ

向島歳旦

はゐあかるいけすの鯉も千金のはるのひかりをむかふ嶋哉

やかた船乗初

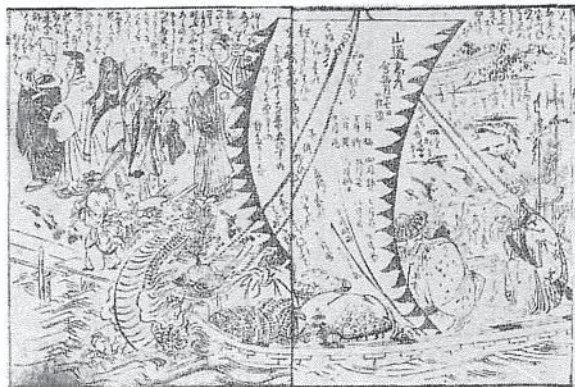
はる風のふく大黒やあひす丸のりそめよしの神たから舟

子供遊ひによせて

立帰る春の小まぐのみとり子となりてハ千代をはいあるかばや

・いつもかわらぬ初春の宝ふね、のつた斗でもさへぬからきをかへて元日早く向嶋の太郎で、一はいのみかけ山のかんがらすカアくといふ日の出より、七ふく神いきなりにて出給ふ、ちかこ





ろ狂歌はやるから、我らも人のし  
つてゐる名をついて一首よもふ、  
ともへあぶぎや丸のゝ字あみのも  
んは□れるからさしづめ弁天の内  
志さ、から衣のかわりにくそくを  
きつしう、るすでいめへと東さ  
くがことか、なんでも二人のうち  
がふくろく寿さ。  
頭きんまてほんに黒人だねとむだ  
をいゝゝ太郎へおもむく。  
・ばくゝと夢をくつたらはらはは  
つた。(象・鹿のことば)  
〔絵〕 向島で船からあがつた七  
人、黒人が寿老人、赤良多び  
す、菅江福禄寿、東作大黒、  
橘洲毘沙門など。宝船には象  
や鹿が乗り、帆に

山道高彦会毎月十七日兼題

正月	梅	四月	郭公	七月	萩
閏月	柳	五月	螢	八月	月
二月	苗代	六月	納涼	九月	菊
三月	花	十月	時雨	十一月	千鳥
		十二月	雪		

二ウ三オ欠  
三ウ

岩井半四郎ヲ画し扇面によせて

末広くいは井あぶぎのとし玉をはんし重ててうの折かた

竹馬

仲吉子好  
呉竹節躬

すなほなる心の竹にむち入てよひとや申春の乗初

・是は娘めがみせましたら大ひゝき、さぞよろこびませう。(坊主  
頭の男、扇面を見て)

四オ

・よみものしせうさんがみたらしかろうぞへ(春駒で遊ぶ子供)  
・何、気なよいが、ものいまいだよ(同右)

〔絵〕 半四郎の女形の扇面を見る男二人、戸外で遊ぶ童二人

子日

浅草安則

傾城へねの日のまつのくらひぬけ客のよわひは引たほれけり

凡巾

藪坂押見

ぬゑならて雲井にうなる鳶凡巾へたれかゝとめの手からなる  
らん

・此比は狂歌師がこねへで相応の内所がしづかさ、是もやつぱりが  
くやおちだ。(遊女)

・まいずみじやアねへ、とびたこのうしろだよ、だかそでだこをあ  
げたと。

〔絵〕 吉原妓楼の二階から遊女と禿と客が外を見る。

こまどり

鶴籠女

いさむ子をやらしと手綱つけひものたかいにこゝろはるのこ  
まとり

羽子の子

玉簾三筋

かそふれひひいふうみんなより合ていつも娘のお目につくは  
ね

・おみのさんおめへ東江へいっついてだ、どふぞ扇へ書てもらい  
たいね。(三味線ひく女)

・みすじのいとねじめどうもいへぬと門之介のかけ合ひきつても  
のだ。山の手のたまむらや大明神様、だれがほめるのかこへ斗  
だ。

・どの子か目すぎ。(子どもたち)

三味線

春駒

かんのよひこゑをはるこま引出して揃ふばちびんほめるうた  
様

手玉

秋風女房

娘の子としもおひとつ  
とる玉のまたいとけな  
きはるの手遊び

・ぼんさんに山道高彦と  
なよい名さ、吉原で大  
もんじやのおまさん  
なきついものだ、よし  
だやのおむめもうつく  
さ、どれも女だけ一入  
評ばん、いけ花よりき  
れいだ。

五ウ

〔絵〕 三味線をひく女  
二人、おはじきする  
女二人、羽子板もつ  
女二人。  
はりうち



七重八重かさねる春のはるかみをちらしはせしといとふはり  
うち

知恵内志

手まり  
とひくるもひいふうみたりいろ系にかゝる手まりのともちと  
りかけ

・手まりをしやうね玉ともいふかね 両国の宝合でハ一ばんあたり  
だね

・あからさんの会に山の手へまいりましたが、にしのかぼからい  
つそ違ふござります (内志のことば)

〔絵〕 針打する女二人、鞠をもつ娘それを立って見ている。

下

六オ

箆目

かこめ／＼かこのうちなる鳥も今朝よあけの春に羽をやのし

桜はね炭

鶴

・木あみより狂歌ちよつかんの身なれど、名ははざかりてよみ人し  
らずにして成と一首ともとめに、すぎの道なれば跡でしかられて  
もよみぬよみ舛やだが、おじきにハ見せたくない、かうした所ハ  
きつい丸やとみそをあげばだ。

・どつちの山が高ひな こつちの山が高彦だ。

六ウ

〔絵〕 米俵を積んだ上に坐る男。前に三人の童あそぶ。  
かくれんぼ 何多良方士

金平ハおそろしい目をかくせども手のなるはうへいきほひぞ  
ある

七種

生 儘成

まだ若菜なくて七種ふりすゝく水の音あるすゝなすゝしろ

・此はるは別而火事さたもなくしてづかな事だ。

・……………の音も手のなるほうかしれぬ。

〔絵〕 七種を打つ男、目隠し鬼をする子ら。

七オ

おりは 江戸川洲住

こひ目しておりはのつゝをふり袖の妹か笑顔の一二ほつとり  
喰つみ

海老のこしのしてこまめをよろこんぶ米沢山にもちてだい

・かうさし□てハ見へかわるいからむだも (虫) かけね

〔絵〕 碁盤より大きい長方形のおりはの台を前にする男女。

あら玉のとしの鏡にむかひてハひかりてりそふ我あたま哉

粕匂齋余旦坊

道中双六

板行も双ろく売もふるたぬきふるきをもつてあら玉のとし

・はいのむとむだをかきぞめにいつそ狂歌のさんが書たくなり、  
みんな玉をかくが一本ていハ御めんだ。

・さいの目よりおれが大目こめだ。

八オ

珍々釜鳴



大鳥毛ふり出す今朝の日本橋双六七里かすむ行列

錦 絵

うつくしきそのいろ／＼をこきませてみやけにもらふ春のにしき絵

・金さんにしき糸をおみせ うた丸かゑだね(二〇) (少女、一枚絵に向い手を出していう)

・釜なりさんのおとつさんハかみなりさんといふそうでいつそやかましい。

・年玉にばくろ町と赤松の狂歌の草しをもらいやした。

〔絵〕 坊主頭と前髪立と二人、双六をするのを少女が坐つて

見、立つ女に背負われた子が一枚絵をぶらさげている。

床の間の軸に、臣是酒中仙。

八ウ

梅

紀 安丸

書初のみたをさうしに菅原の梅ハ諸木にさき辰の春

松

子の目する千代の小まつのみとり子ハいきせひはるの車引そめ

九オ

桜

手習ひハ互にいろをはる遊び書ちらしたる児さくら花

・此松王かひきずりかけたこのつくへを一すんなりとも引て見ろ、

つらちうをすみだらけにしてやるぞ。

・公家あくの大あくハ大やのうらずみた。

・時の狂歌師木あみを悪口なしたるやつなれば、此はりがねてしばつてやるぞ。

・よい所であいずらうそく見せびらきからうれやすわるさを時平(二一)がしりこぶたふたみた。

・五六百よまさねばおかぬ／＼。

・是からあとでちうしんぐらをしてさだ九郎にうちわやをさせよふ。こたつやぐらハあぶなかん平だ。

〔絵〕 子供ら机をひっくり返し、一人はこたつの上に乗る、

九ウ

穴 市

打よりて子ともハ春のいろよりもかく穴市のあなかしこ爰

草履隠

真竹深薮  
真竹深薮

春風の今朝ふくなみにつんぬけてひねにハあらず数の子宝

・にしくぼのゑびす三郎もくあみさまハ狂歌の名人で、へたなやつらのあくたいをつつたぞさいな。

・川ばたのごやうでハなくて御やう人だ。そんな事いふと政□さんがしかるよ

〔絵〕 穴市をする子二人に酒屋の御用も仲間入。うしろを釣

竿をかついだ恵比寿の姿の髭男が急いで通る。

十オ

鶯 笛

鶯 笛

見るものゝお目に月日のほしきとて鶯笛のねたりことなり

ゑひす舞

春遊び我もこまめのとゝましりお目にかけ網若ゑひす舞

・けふハよつぽど銭をうぐひすぶへだ。

・くされせうりをなげだし□□むまでハなくてとし花だよ。

〔絵〕 鶯笛を売歩く男、道にしやがんで草履をならべる子ら。

・ろせいが夢ハ五十年金平が夢ハかみかず十まい、ほていでもなく

しやれでもなくかきあつめたる子宝の、ふく大黒やゑびす歌をま

さか目出たく山王のさくら木にちりばめ、三万三千三百をとつて

のけ三十五まんさいぞうの、まつちやらことしも辰の春、四方山の手のより合がき、がくや落より神なりのつまんでこゝにかきた

るハ、へそくり天王のこういんわい／＼天王の惣領。

歳 旦

歳 旦

立婦りまた此やうにあとけなき名もおもしろし夢の初春

・息子へそむらの住人すばしりのや先、一寸出べその穴主も、よん所なきやうじ有は他筆をもつて目出たく申納候

歌麿門人千代女画

金平子供遊 注

(一) 山道高彦の住所。(二) 平秩東作は北海道の江差に滞在中。(三) 浜辺黒人。(四) 先代加保茶元成の未亡人。(五) 『早来恵方道』注でふれた誰袖が幕府の要人土山に寵されるのを暗示したか。(五) 書家沢田東江。吉原で出張指導したのである。(六) 『太の根』などにも出る。(七) 木網・内子夫妻の住所。(八) 勘気にくれたとの意か。(九) 一本亭芙蓉花、上方狂歌師。(一〇) 歌麿。(一一) 木網の初名は網破損針金。木網を大屋裏住が批判したか。



# 入 集 者 索 引

		略号 前 (大木の生根)		後 (太の根)	年 (年始御礼帳)
		早 (早来恵方道)		金 (金平子供遊)	数字は丁数
秋風女房	金 5	小造千万里	年10	名万寿盛方	前 3
阿久垂粕	年11	小袖行丈	後 6	奈良花丸	前 7
浅草安則	金 4	子子孫彦	年 1	ぬら蔵人	後 3
阿那加師古	年 6			根穀芋輔	後 4
余茶福有	年14	坂月米人	前10	音小便垂高	後 3
磯辺賤男	早 8	坂上竹藪	年 2		
一富士二鷹	前 9	桜はね炭	金 6	土師攝安	前12, 後 4
梁仲墨	後 8	酒吞親文	早 3	腹唐秋人	後 1
馬屋厩輔	早 1	七常持	後 4	播磨鍋取	年15
梅下武士	年 7	沢辺あや子	前14	膝元さぐる	後 6
宇和空成	早 9	沢辺帆足	早 7	飛車先角道	早10
雲染斎	年13	三里季高	年 3	人真似小まね	前15
海老船守	前 9	地口有武	年 6	独寐欠	早 8
大石小石みかげ	年 4	将中尉泡盛	前10	桧皮釘武	年 3
於保久旅人	後 6	菅垣仲住	早 6	吹穀咽人	後 9
太原ざこね	前 5	雀酒盛	後 9	袋筒長	後 5
大飯食人	年 8	隅田中汲	年 9	藤満丸	年12
大屋裏住	前 1	膳前橋尚義	前 2	節葉仲貫	早 5
岡部唐安	早 6	其管琴成	早 4	襖明立	後 8
小川町住	早 4			富家来富有	年 9
於曾礼長良	前 8	薪高直	年 5	布留糸道	年14
		田子浦人	早 2	臍穴主	金10
書出田丸	年10	多田人成	年15	法帖石摺	前13
柿下手丸	年12	玉藤三筋	金 4	星屋光次	早 6
河岸高積	年 9	丹青斎	後10		
粕句斎余丹房	金 7	智恵内志	金 5	味噌小式部	年 5
片袖足成	前12	珍々釜鳴	金 8	みどりの葉十	年12
加倍仲塗	年11	薦から丸	年12	峯松風	年 1
加保茶元成	前 2	つむり光	前 6	宮地かけ富	早 8
勘定疎人	早 5	津良河厚	早 2	門限面倒	後 7
勘定外成	前 4	鶴籠目	金 4		
紀定丸	年 6	鶴羽重 (紀津丸)	年10	八十氏人	年 5
紀たらんど	後 1	つわものの交	年 9	矢立綿純	早 7
紀まま成	後 3	てるてる法師	年15	宿屋飯盛	後 2
紀躬鹿	年 7	天地玄黄	前 6, 7, 13	やはり棟梁	前 5
紀安丸	後 9, 金 8, 9	田夫野人	前14	藪坂押見	金 4
京間内則	年15	天保川成	年 8	山手白人	年 2
草刈童	後 4	鳥空音	年 3	山道高彦	金 1
久寿根兼満	早 3	問屋酒船	前 8, 11	湯車いかほ	前15
雲の下人	年13			夢のよし鷹	早 3
栗成笑	年13	中仙道問屋馬人	後82	吉野葛子	金 5
呉竹よぼけ	年14	仲吉子好	金 3, 7	四辻占棉	後 5
呉竹節躬	金 3, 9	七転八起	早 9		